

昭和新撰江戸 33 観音霊場巡り、浅草、上野、お茶の水コース

上野の寛永寺



葛飾北斎筆 東叡山中堂之図
 寛永寺清水観音堂が描かれた
 広重「上野清水堂不忍ノ池」
 画中に「月の松」が見える



寛永寺五重塔
 (重要文化財)

浅草寺境内、発願は本堂左側の影向堂(えんこうどう)になります。



影向堂 (上写真)

観音さまのお説法や活躍に不断に協力されている仏さま方を影向衆とお呼びし、これらの仏さまをおまつりするお堂です。

旧影向堂は、現淡島堂で二天門の脇にありました。現存するお堂は、平成6年改築です。

須弥壇(しゅみだん)中央に聖観世音菩薩、その左右に生れ年(干支)ごとの守り本尊八軀を祀っております。

尚、伝法院境内に入ることには出来ません。

昭和新撰江戸33観音第一番は影向堂(ようこうどう)の聖観世音菩薩と八脇侍です。御朱印受時は「江戸観音順礼」と告げて下さい。

浅草寺境内 (せんそうじ)

女神輿：2023/5 影向堂裏広場集結する西一番。

三社祭の2日目は、浅草社に百騎近く集る
連合渡御が行われ、無病息災商売繁盛祈願す。

伝法院庭園：スカイツリーの遠景

伝法院はイベント時以外公開していません。



上野公園第六番と
湯島天神第七番の位置



矢先稻荷社：一般拝観は事前許可が必要です。

社殿の天井一面に描かれた日本乗馬史百騎の絵馬

かつぱ寺、曹源寺には河童大明神と地名の縁となる、
隅田川の河童「ぎーちゃん」の逸話が残っています。

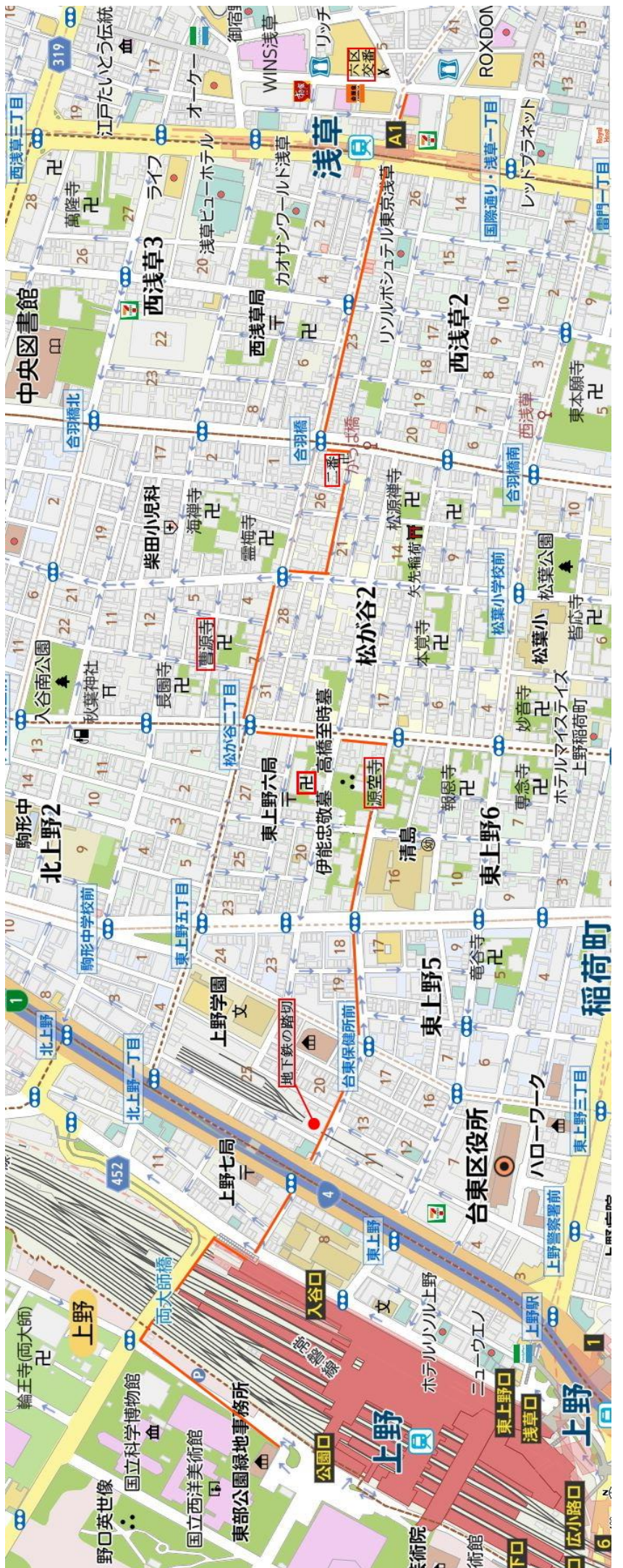




湯島聖堂、元昌平坂聖堂での日本初の博覧會 昇齋一景 1872 年。名古屋城の鯨が見えます。
 神田明神、平將門大神輿と將門塚保存会々長 関東大震災で紛失の後 80 年ぶりの復活だそうです。



江戸の三富 谷中感応寺、湯島天神、目黒瀧泉寺
 江戸時代に大流行した宝くじの起源「富突」富くじ
 幕府は、元禄五年(1692)に禁令を出し、特定の寺社の
 興行だけこの富くじを認め、それ以外は私的賭博行為
 として一切禁止されました。
 学問の神菅原道真を祀る湯島天神で博打行為？
 しかし、幕府公認の御免富も天保 13 年(1842)の
 天保の改革によって全面禁止となりました。



巡拝コース： 常磐線ホーム上の階段を3階へ上がらないと東武乗入れやつくばTXに連絡しない。

北千住駅—東武スカイツリーライン4番線で浅草駅へ移動、以後徒歩 105分 7.3km

浅草寺影向堂〜浅草六区交番以降は、左記地図参照、赤線と赤枠で神社等を徒歩で巡拝します。

上野公園内清水観音堂第六番、湯島天神参道下の心城院第七番は、カラー2頁に地図があります。

湯島天神以降は、大鳥居前の道「清水坂」を下ります。蔵前橋通り先より神田明神

昌平坂　〜　仰高門、湯島聖堂　〜　聖橋、太田姫一口(いもあら)元宮の棟、新御茶の水駅解散。

新御茶の水駅—千代田線—北千住、我孫子方面行に乗車して下さい。

【頁下の写真】湯島聖堂大成殿の甍(いらか)、聖殿を守る、塩を吹く鬼口頭と猫顔の聖獣鬼龍子。

次の案内　7月16日(日)AM8時半、JR常磐線南千住駅改札外、小伝馬町、人形町、両国橋、

東武スカイツリー駅で解散12時過予定。



鬼口頭(きぎんとう)上と鬼龍子(きりゅうし)下。

昭和撰江戸三十三観音霊場巡り

発願、浅草上野神田コース

御宝号 南無大慈大悲観世音菩薩

江戸三十三観音霊場

江戸時代、西国三十三観音や坂東三十三観音などの観音霊場巡礼が流行した際、各地で既存の観音巡礼を模した新たな札所、観音霊場が設けられました。

江戸では近畿7府県に広がる西国三十三観音霊場をもとにして、33ヶ寺院の札所を設けました。

江戸御府内とその周辺を含めて江戸時代には、記録に残っているだけで二十ヶ所もの西国写し霊場が存在していたと云われています。

これらの霊場は、「昔、京順礼や江戸順礼といふことありときけり。是は富家の婦女、又茶屋者、風呂屋者などとなへし売女の類、衣装に伊達を尽くし笊摺(おいずる)胸札をかけて、実の順禮の如くいでたち、洛陽三十三所の観音へまうつるを 京順禮と云なり。江戸順禮も又是におなじ」柳亭種彦『足薪翁記』とあるように、幕府の厳しい規制下で自由に衣装本能を謳歌できない都市女性が近くの巡礼に仮託して、風俗の解放を求めたもの とされ、京都で流行した後白河法皇選定の洛陽三十三所観音霊場巡礼をもととし、信仰よりも健康、旅行と娯楽、交流と情報交換の一環として行われていたものであった様です。

これら数々の江戸三十三箇所は神仏習合のものもあり、例えば「江戸西国三十三所」では「ここから眺める不忍池の景色が、石山寺から眺める琵琶湖の景色に似ている」という理由で上野の五條天神社も札所の一つにされていました。

現行の江戸三十三箇所もこの江戸時代の観音巡礼の一つに起源を持つとされており、元禄年間設定の観音巡礼は「武蔵三十三箇所」「江都古来三十三箇所」の二つあり、現在のものがどちらを起源とするのかは良くわかっていません。

田上善夫は現在の「昭和撰江戸三十三観音札所」の前身を寛文八年(1668)選定の「江都三十三所観音」としています。

いずれにせよ現在の札所には三番の大観音寺、五番の大安楽寺など明治時代創建、果ては昭和26年開創の世田谷山観音寺といった近現代に作られた寺院も含まれており、田上氏によれば「江都三十三所観音」の33ヶ所中19箇所が廃絶し、昭和撰時に19箇所が新規に加えられたとしています。

以上のような歴史上の経緯により、昭和の時代に、諸々の事情により新たに選択しなおした観音霊場であるために「昭和撰」と付記されました。

なお、平成4年には30番札所が入れ替わっています。
【補足】「順礼」日本固有、「巡礼」世界共通で同意語ですが「遍路」は大師霊場の場合のみの呼称とされています。

第一番、金龍山浅草寺(せんそうじ)、

昭和25年に独立して聖観音宗本山

(天台宗系単独寺)、別称 浅草観音

御本尊 聖観世音菩薩(絶対秘仏)、

お前立ちは、12月13日午後2時からの開扉法要

の際に開帳され、年一度です。

真言…おん ありりきやそわか

御詠歌…深き谷 今より後は よもあらじ

つみ浅草へ 参る身なれば

推古天皇36年(628)創建、伝承

土師中知(真中知)開基、伝承

文化財 法華経(国宝)。

二天門、伝法院、元版一切経(国重文)

『浅草寺縁起』等にみえる伝承による

浅草寺創建の由来。

飛鳥時代の推古天皇36年(628)、現隅田川の宮戸川で漁をしていた檜前浜成と竹成(ひのくまのはまなり)とたけなり)兄弟の網にかかった仏像がありました。之が浅草寺本尊の聖観音像です。

この像を拝した兄弟の主人土師中知(はじのなかも)は出家し、自宅を寺に改めて供養しました。

之が浅草寺の始まりです。その後大化元年(645)、勝海という僧が寺を整備し観音の夢告により本尊を秘仏と定めました。

観音像は高さ一寸八分(約9.5cm)の金色の像と伝わっていますが、公開されることのない秘仏のためその実体は明らかではありません。

平安時代初期の天安元年(857)或は天長五年(828)、延暦寺の僧円仁、慈覚大師が来寺して「お前立ち」の観音像を造ったといわれています。

これらを機に浅草寺では勝海を開基、円仁を中興開山と称しています。

天慶五年(932)安房守平公雅が武蔵守に任ぜられた際に七堂伽藍を整備したとの伝えがあり、雷門、仁王門(宝蔵門)などはこの時の創建といわれる。

一説に、本尊の聖観音像は、浅草寺創建より百年前に、埼玉東京の県境に近い飯能市岩淵の成木川沿いにある岩井堂に安置されていた観音像が大水で堂ごと流され行方不明になったといわれています。

成木川は入間川、荒川を経て隅田川に流れており、下流にて尊像発見の報を聞いた郷の人々が返還を求めたが叶わなかったといわれています。

境内とその周辺の浅草寺関連物件

表参道入口の門。切妻造の八脚門(やつあしもん)で向かって右の間に風神像、左の間に雷神像を安置することから正式には「風雷神門」というが「雷門」の通称で通っています。慶応元年(1865)に焼失後は仮設の門が時折建てられていましたが、昭和35年に常設の門が再建されました。

松下電気の松下幸之助が浅草観音に祈願して病氣平癒した報恩のために寄進したもので、門内に松下電器産業、現パナソニック寄贈の大提灯があります。三社祭の時に神輿通過のためと台風到来の時だけ提灯が置まれます。

風神雷神像は頭部のみが古く、体部は慶応元年(1865)の火災で焼失後、明治7年(1874)に補作。昭和35年の門再建時に補修と彩色が加えられています。

門の背面の間には「金龍天龍」の像を安置、西の女神金龍は仏師菅原安男、東の男神天龍は彫刻家平櫛田中の作で、昭和53年に奉納されたものです。

雷門から宝蔵門に至る長さ約250mの表参道の両側には土産物、菓子などを売る商店が立ち並び「仲

見世通り」と呼ばれています。

商店は東側に54店、西側に35店を数えます。寺院建築風の外観を持つ店舗は、関東大震災による被災後、大正14年(1925)に再建されたものです。

浅草寺は付近の住民に境内の清掃を賦役として課すかわりに、南谷の支院の軒先に床店、小屋掛けの店を出す許可を与えていました。貞享二年(1685)頃のこと、これが仲見世の発祥といわれています。

宝蔵門は、雷門をくぐり、仲見世通りの商店街を抜けた先にあります。

入母屋造の二重門は、2階建てで外観上も屋根が上下二重になっている門作りです。江戸時代には一年に数度2階部分に昇ることが出来たそうです。

現在の門は昭和39年に再建された鉄筋コンクリート造で、実業家大谷米太郎夫妻の寄進によって建てられたものです。

門の左右に金剛力士の仁王像を安置することからかつては「仁王門」と呼ばれていましたが、昭和の再建後は宝蔵門と称しています。

その名の通り、門の上層は文化財「元版一切経」の収蔵庫となっています。

2体の金剛力士像のうち、向かって左(西)の阿形(あぎょう)像は仏師錦戸新観、右(東)の吽形(うんぎょう)像は木彫家村岡久作の作です。

阿形像のモデルは力士の北の湖、吽形像のモデルは明武谷(みょうぶたに)と言われています。

門の背面左右には、魔除けの意味をもつ巨大なわらじが吊り下げられています。これは、前述の村岡久作が山形県村山市出身である縁から、同市の奉賛

会により製作奉納されているもので、藁250kgを使用しているそうです。

わらじは十年おきに新品が奉納されているが、稲藁は長い方が加工しやすいものの、近年の稲作では全国的に稲藁の利用の激減や、風雨で倒れにくく収穫しやすいことから、丈の低い品種への品種改良が進みました。同市ではこのために丈の高い古い品種を特別に栽培しています。

耐震性の向上と参拝客に対する安全確保のため平成19年に屋根改修工事を行い、軽量さと耐食性に優れたチタン製の瓦を全国で初めて採用しました。

本堂は、ご本尊の聖観音像を安置するため観音堂とも呼ばれています。

旧堂は慶安2年(1645)の再建で近世の大型寺院本堂の代表作として国宝に指定されていましたが、昭和20年の東京大空襲で焼失してしまいました。

現在の堂は昭和33年に再建されたものです。再建にあたっては、建設資金を捻出するために瓢箪池(ひょうたんいけ)の敷地2400坪が江東楽天地などに売り払われました。

外陣には川端龍子筆「龍の図」、堂本印象筆「天人散華の図」の天井画があります。

内陣中央には本尊の聖観音像の絶対秘仏を安置する八棟(やつむね)造りの宮殿(くうでん)があります。

宮殿内部は上段の間と下段の間に分かれ、上段の間には秘仏本尊を安置する厨子を納め、下段の間には前立本尊の観音像が安置。

下段の間にはこのほか徳川家康、徳川家光、公遵法親王である中御門天皇第二皇子、天台座主がそれ

ぞれ奉納した観音像が安置されています。

宮殿の扉の前には「御戸帳」と称する、刺繍を施した帳(とばり)が掛けられています。

宮殿の手前左右には梵天と帝釈天像が立つ。

宮殿の裏には秘仏本尊と同じ姿という通称裏観音の聖観音像、堂内後方左右の厨子内には本尊の脇侍として不動明王像と愛染明王像が安置されています。2020年6月13日午前、新調された扁額の奉納法要が行なわれました。

五重塔は、天慶5年(942)平公雅が塔を建立したと伝わる。この塔は三重塔であったといわれ、『江戸凶屏風』にも描かれています。

焼失を繰り返したのち慶安元年(1648)に五重塔として建立され、本堂と同様、関東大震災では倒壊しなかったが昭和20年の東京大空襲では焼失しています。

現在の塔は本堂の西側、寛永8年(1631)に焼失した三重塔の跡伝承地付近に場所を移して、昭和48年に再建されたもので鉄筋コンクリート造、アルミ合金瓦葺き、基壇の高さ約5m、塔自体の高さは約48m、基壇内部には永代供養のための位牌を納めた霊牌殿などがあり、塔の最上層にはスリランカ・アラダプラのイスラムニヤ寺院から請来した仏舍利を安置しています。

なお、再建以前の塔は東側にありました。その位置は交番前辺りで「塔」と刻まれた標石が埋め込まれていたが、平成21年新たに「旧五重塔跡」と記された石碑が設置され、周辺には木が植えられて憩いの場となっています。江戸四塔、江戸六塔の一つに

数えられています。

二天門、重要文化財。

本堂の東側に東向きに建つ、切妻造の八脚門で、元和4年(1698)の建築、第二次世界大戦にも焼け残った貴重な建造物です。

この門は、本来は浅草寺境内にあった東照宮への門として建てられたものです。東照宮は寛永19年(1642)に焼失後、再建されていません。

現在、門の左右に安置する二天像持国天と増長天は、上野の寛永寺墓地にある蔵有院、徳川家綱霊廟から移されたものです。

浅草(あさくさ) **神社**は、本堂の東側にあります。

拜殿、幣殿、本殿は重要文化財。浅草寺の創建に関わった三神の祭神を祀る神社です。明治の神仏分離以降は浅草寺とは別法人になりました。

伝法院(でんぼういん)は、宝蔵門の手前西側にあり、浅草寺の本坊になります。

小堀遠州の作と伝えられる回遊式庭園があります。通常は、一般公開していませんが、正月三ヶ日に特別公開されることがあります。

平成23年、国の名勝に指定されました。院内にある天祐庵は表千家不審庵写しの茶室で、江戸時代後期の建立。もとは名古屋にあった茶室です。

浅草寺病院

境内北側にて社会福祉法人浅草寺病院を運営。1970年に発生した大水害の被災者のための救護所「浅草寺診療所」を念仏堂に設けたのが始まり。

駒形堂

寺の南方、隅田川に架かる駒形橋西詰の飛地境内

にある小堂。本尊は馬頭観音立像で秘仏。

浅草寺本尊聖観音像の「示現の地」とされ、かつて船で来訪する参詣者はここで下船し、駒形堂に参詣してから観音堂へ向かったといわれています。

堂は、元来隅田川に向いて建てられていたが、現在の堂は江戸通り側を正面とし、川には背を向けた形になっています。

本尊は毎月19日の縁日に開扉され法要が行われます。

二尊仏

宝蔵門手前右手にある2体の露座の銅造仏像。

「濡れ仏」と通称する。向かって右が観音菩薩、左が勢至菩薩像です。

台座を含めた高さは約4.5m。貞享4年(1687)の作で、台座の刻銘によれば、上野国館林の高瀬善兵衛という人物が、かつて奉公した日本橋の米問屋成井家への報恩のために造立したものとあります。

久米平内堂

(くめのへいない) 二尊仏の手前にある小祠。ここに祀られる久米平内とは、講談等に登場する半ば伝説化された人物です。その伝記等は定かでないが、剣の道に優れ、多くの人の命を奪った、首切り役人だったともいう、その罪滅ぼしのために、自らの像を仁王門の近くに埋めて多くの人に踏みつけさせたという。

「踏みつけ」が「文付け」(恋文)に通じることから、縁結びの神とみなされるに至っています。

弁天山

宝蔵門の東方、広場の奥にある小山を「弁天山」といい、石段上に朱塗りの弁天堂、その右手に鐘楼

が建つ。弁天堂は昭和58年再建、鐘楼は木造で昭和25年再建で、梵鐘は江戸時代の人々に時を知らせた「時の鐘」の一つです、

「元禄5年(1692)深川住の太田近江大掾藤原正次が改鑄」の銘があります。松尾芭蕉の句「花の雲鐘は上野か浅草か」と関連して説明されることが多いが、この句は現存する鐘の鑄造の5年前の貞享4年(1727)に詠まれたものだそうです。

弁天堂への石段の左側には芭蕉の「観音の甍(いらか)見やりつ花の雲」の句碑があります。

影向堂(ようこうどう)、

昭和新撰江戸観音霊場第一番札所になります。

本堂の西側にあります。寄棟造、鍔葺き(しころぶき)屋根で、平成6年の建立。

堂内には本尊聖観音像のほか、鎌倉期の円派の様式を示す阿弥陀如来坐像等の十二支の守り本尊である八体の仏像を横一列に安置しています。

影向堂の周囲には六角堂、橋本薬師堂、石橋などがある。影向堂の左に建つ六角堂は東京都指定有形文化財で、室町時代の建立、小規模ですが境内最古の建物です。堂内には内陣の須弥壇中央に聖観世音菩薩を祀り、その左右に千手観音、虚空蔵菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩、勢至菩薩、大日如来、不動明王、阿弥陀如来の八本尊を祀り、外陣には浅草名所七福神の大黒天を祀っています。

影向堂境内の石橋は国指定重要美術品です、かつて境内にあった東照宮への参詣用に造られたもので、元和4年(1618)、東照宮が勧請された際に建造され

ました。東照宮自体は焼失後再建されていません。

浅草寺六角堂は、『浅草寺誌(文化十年編)』に、元和4年(1618)に掘った井戸の上に建っていることを示す記述があり、さらには古い建築様式も採用されていることから浅草寺内に現存する最古の建造物と考えられます。

実際、建物底部は六角形状に廻した木製土台と基礎石で支えられ、更に、その下部に11段の石積みをした深さ1.5m余りの井戸状の穴が掘られています。建物は、木造、棧瓦葺、朱塗りの六角円堂で、建物中央の直径は1.83m、一面の柱間は0.91m、都内ではあまり見かけない特異な形式の建造物です。

屋根を支える垂木は、建物の中心から傘の骨のように放射状に広がる「扇垂木」という形式で、桁の木組みも六角形に組むため、細工も難しく、大工の腕の見せ所のひとつのことです。

六角堂内には、日限を定めて祈願すれば、必ず靈験があるという「日限地藏尊」が安置されています。このため、日限地藏堂とも言われています。

淡島堂は影向堂のさらに西側に建つ。

江戸時代、元禄年間に紀州国の淡島明神を勧請したことからの名があります。

境内地の再整備の際に旧影向堂を移して淡島堂としたものです。この堂は昭和30年までは浅草寺の仮本堂でした。

堂内には本尊阿弥陀如来坐像、向かって左に淡島神の本地仏とされる虚空蔵菩薩像が安置されていま

す。毎年2月8日にこの堂で針供養が行われることで知られていました。

鎮護堂は、本坊伝法院の鎮守で、伝法院通りを西方に向かって歩いた右手に入口があります。

伝法院は非公開ですが、敷地の南西にある鎮護堂のみは公開されており、ここから柵越しに伝法院の回遊式庭園が瞥見できるとか。

ここに祀られる「鎮護大使者」とはタヌキです。明治時代の初期、境内には多くのタヌキが住み着き、寺では手を焼いていました。

ある夜、当時の住職の夢にタヌキが現れ、「自分たちを保護してくれるならば、伝法院を火災から守ってやろう」と住職に告げたため、この堂を建てて鎮守とすることにしましたといいます。切妻造の拝殿の奥に建つ本殿は大正2年(1913)の建立です。

宝蔵門のそばに「浅草不動尊」と「三宝荒神堂」があります。天台宗の大行院という寺院で、浅草寺には属していません。

境内の銅像、碑など

大谷米太郎夫妻像、本堂裏広場奥。宝蔵門を再建寄進したホテルニューオータニ創業者大谷米太郎夫妻の胸像。昭和42年造立。

九世市川團十郎「暫」の像、影向堂裏広場。

天保9年(1838)10月13日(明治36年(1903)9月13日)、歌舞伎役者、市川家屋号は成田屋。

歌舞伎界では、九代目という団十郎を指し、更に劇聖(げきせい)と言われた大役者でした。

宮古路豊後塚(みやこうじぶんこのこう)追悼碑、豊後節の祖。養嗣子である宮古路文字太夫、初代常磐津文字太夫によって、延享3年(1796)に建立。

豊後節は一中節から派生し、この豊後節からは宮園節、新内節、そして豊後三流の頭取である常磐津節、そこから富本節が派生し、清元節へとつながることになる。現存する浄瑠璃人流派のうちの六流派が、この豊後系の浄瑠璃にあたる。

松尾芭蕉句碑、弁天山石段の左方。寛政8年(1796)建立。

迷子知らせ石標、本堂前。江戸に数箇所あった迷子知らせ石標の一つで、安政7年(1830)に建立されたが、現在の石標は昭和32年に復元されたもの。

「鳩ボツポ」の歌碑、本堂前。東くめ作詞、瀧廉太郎作曲で明治33年(1900)に発表された童謡「鳩ぼっぽ」の歌詞と楽譜を表した碑ですが、この曲は文部省唱歌の「鳩」とは別の曲です。

映画弁士塚、淡島堂南側の「新奥山」と称する一画に立つ。無声映画時代に活躍した弁士を称えるために昭和33年建立された。題字は鳩山一郎の書。

喜劇人の碑、新奥山にある。昭和57年建立。川田晴久を筆頭に、古川ロッパ、榎本健一、大宮デン助、伴淳三郎等の日本喜劇人の名が刻まれています。

瓜生岩子像、新奥山にある。瓜生岩子(1829～1897)は、今の福島県喜多方市の出身。生涯を弱者、貧困者の救済、社会事業に捧げ、日本のナイチンゲールと称される人物です。銅像は明治34年(1901)に造立されたが、第二次大戦時の金属供出で失われ、昭和30年に再建されたもの。

『こちら葛飾区亀有公園前派出所』記念碑、浅草神社鳥居脇。平成17年に秋本治の漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の単行本の発行部数が一億3,000万部を突破したことを記念するため建立された。

同作品の主人公である「両さん」こと警察官両津勘吉は浅草育ちという設定になっており、両津の少年時代のエピソードを題材にした「浅草物語」の巻に浅草神社が登場した縁により建立されたものです。消防殉職者表彰碑、本堂裏広場奥。大正元年(1912)、毎年5月25日に慰霊祭が行なわれ、本堂裏手広場では梯子乗り、木遣、纏振りの演技が披露されます。

浅草大平和塔、1963年8月15日の建立で湯川秀樹の碑文が刻まれている。老朽化のため2019年に建て替えられています。

この他、浅草神社境内には久保田万太郎句碑、川口松太郎句碑、河竹黙阿弥顕彰碑、市川猿翁二代目市川猿之助の句碑、初代中村吉右衛門句碑などがあります。

第二番、江北山宝聚院清水寺、天台宗

御本尊…千手千眼観世音菩薩

ご真言…おん ぼざら たらま きりく

御詠歌…只頼め 千手の誓ひ ひろければ

枯れたる木にも 花咲くといふ

天長6年(829)、疫病沈静の為、天台宗総本山比叡山延暦寺の慈覚大師が時の天皇の下令により、自ら千手観音一体を刻み、江戸平河(現千代田区平河)に清水寺を開き千手観音を祀ったのが始まりといわれています。

慶長年代に慶円法印が中興、江戸城修築のため日本橋馬喰町に寺を移しましたが、明暦3年(1657)の振袖火事により全焼。現在地に再興されました。宝珠を載せた宝形屋根がお寺であることを象徴しています。

矢先稻荷神社 (巡拝外)

清水寺から三つ先の路地を右へ入ると矢先神社に出ます。

家光公が三十三間堂を建立した際、鎮守として稻荷神を勧請したのが始まりといえます。

「通し矢」を行った時に的の先にあつたので「矢先」と呼ばれるようになったとか。

矢先稻荷神社の御祭神…宇賀御魂命

社殿の天井一面に描かれた日本乗馬史百騎の馬が敷き詰められています。

浅草名所七福神の福祿寿がいらっしやいました。

かっぱ寺、曹源寺、曹洞禅宗

天正16年(1588)和田倉門付近に開創

天正19年(1591)江戸城拡張で湯島天神下に移転

明暦3年(1657)振袖火事により現在地に移転

文化11年(1814)雨合羽商の喜人が葬られました。

かっぱ大明神

新堀川、現在の合羽橋道具街通りの堀削工事に私財を投じて尽力した合羽屋喜八が没し、菩提寺である曹源寺に葬られました。

この辺の土地は低いうえ水捌けも悪かったため、住民たちの難渋は見るに堪えなかつたようです。

そこで喜八が工事をはじめたそうです。その工事のおり、かつて喜八に命を助けられた「河童のぎーちゃん」が出迎えてくれます。

隅田川の河童は命の恩人に協力したといい、喜八の手伝いをしました。後世この河童を見たものは不思議と商売が繁昌したと伝えられています。

この河童大明神は、商売繁盛、火水難除けに、厚い信仰が寄せられています。

五台山文殊院源空寺 浄土宗

ご本尊：円光大師、創建：1604年

江戸時代の学者や絵師等の有名人が埋葬されている

伊能忠敬、墓名：東河伊能先生之墓、地図学者

文政元年(1818)四月、享年七十四

高橋至時(よしとき)、墓名：東岡高橋君之墓

文化元年(1804)一月、享年四十一

伊能忠敬の先生

高橋景保(かげやす)、天文学者

天明五年(1785)文政十二年(1829)二月、

シーボルト事件(日本地図国外流出)で投獄、

伝馬町牢屋敷にて獄中死している。

谷文晁、天保十二年(1841)十二月享年七十八

谷軒々、ご夫妻とご一緒に墓石が並んでいます

幡随院(ばんずいん)長兵衛、江戸の伊達男

浅草歌舞伎の流行演目で有名人となる、

実存した「江戸の伊達男」

水野十郎左衛門に「だまし討ち」で亡くなる。

墓地は通り向側になります。墓地敷地内には、長

泉寺という真宗大谷派の寺社なのですが、なぜ。

東叡山寛永寺輪王殿、輪王寺、寺格：門跡寺院

御本尊：阿弥陀如来、創建：正保元年(1624)

別称：両大師、開山堂

寛永寺の開山天海(慈眼大師)は、寛永20年(1643)に死去し、翌正保元年(1624)、現輪王寺の地に天海を祀る開山堂が建てられました。

天海が崇敬する良源(慈恵大師、元三大師)を併せ祀ったことから「両大師」と呼ばれるようになりました。

日光の輪王寺は明治初年の神仏分離後に旧名の満願寺となっていたが、明治16年(1883)に輪王寺の寺号復称が許可され、2年後の明治18年(1885)には「輪王寺門跡」の称号が復活しています。

開山堂は慶応4年(1868)の上野戦争では焼け残りでしたが、平成元年に火災に遭い、天明元年(1782)再建の開山堂と寛政4年(1793)再建の本堂が焼失しています。現在の本堂は平成5年に再建されたものです。

境内西側に本堂、東側に輪王殿(齋場)があり、輪王殿の手前には西隣の東京国立博物館敷地から移築した、国重要文化財寛永寺旧本坊表門が建っています。

寛永寺旧本坊表門

切妻造り本瓦葺、潜門付きの薬医門造りです。

通称名黒門。現在の東京国立博物館の敷地はもと寛永寺の本坊で、その正面にあった山門でした。

明治15年(1882)東京国立博物館の前身である博物館が上野公園に移転開館した際にその正門として使用されたそうです。

関東大震災の後、博物館改築に伴い現在地に移築されましたが、その門扉には上野戦争の際の弾痕が残されています。

なお、寛永寺入口にあった「黒門」は荒川区円通寺に移築、之とは別の門になります。

昭和21年11月29日国重文指定。平成元年(1989)の火災の際は焼失をまぬがれた。本堂前の鐘楼に懸かる梵鐘は慶安4年(1651)に製作したものです。東京都指定有形文化財。

本堂前の参道左右の銅燈籠は元、上野の大猷院徳川家光靈廟に奉納されたものです。

東叡山円頓院寛永寺、天台宗関東総本山。

開山：天海、開基：江戸幕府3代将軍徳川家光、御本尊：薬師如来

徳川将軍家の祈祷所兼菩提寺です、徳川歴代将軍15人のうち6人が寛永寺に眠っています。

17世紀半ばからは皇族が歴代住職を務めて朝廷との繋がりが深く深かったようです。

日光山、比叡山をも管轄する天台宗の本山として近世には強大な権勢を誇りましたが、幕末の動乱期に主要な伽藍を焼失しています。

かつての境内の大部分は上野公園となっています。江戸にあった徳川家の菩提寺のうち、増上寺は中世から存在した寺院ですが、寛永寺は天海を開山とし、徳川家により新たに建立された寺院です。

徳川家康、秀忠、家光の3代の将軍が帰依していた天台宗の僧南光坊天海は、江戸城の鬼門の方を憂慮し、そのことを知った秀忠は、元和8年(1622)、

現在の上野公園の地を天海に与えました。

当時此処には伊勢津藩主藤堂高虎、弘前藩主津輕信枚、越後村上藩主堀直寄の三大名の下屋敷があったのですが、それらを収公し寺地に充てたものです。

秀忠の隠居後の寛永2年(1625)、三代將軍徳川家光の時に今の東京国立博物館の敷地に、貫主の住坊の本坊が建立され、寛永寺の創立年とされています。

創建当時の年号である「寛永寺」とすることを許され、京の都の鬼門、北東を守る比叡山に倣い、東の比叡山という意味で山号を「東叡山」としました。

寛永寺の伽藍は延暦寺の様式に準じて造営され、寛永4年(1627)には法華堂、常行堂、多宝塔、輪蔵、東照宮などが、寛永8年(1631)には清水観音堂と五重塔が、根本中堂の建設は五代將軍徳川綱吉の時代、

元禄10年7月に柳沢吉保が惣奉行を拝命し開始され、元禄11年(1698)8月11日に上棟式が行われ落成しています。

位置関係では、根本中堂と護国寺、根本中堂と浅草寺を結ぶ線は一直線につながり、根本中堂は日光表参道の延長線上に存在しているようです。

寛永寺と増上寺の関係は、近世を通じて寛永寺は徳川將軍家はもとより諸大名の帰依を受け、大いに栄えました。

ただし、創建当初の寛永寺は徳川家の祈禱寺でしたが、菩提寺という位置づけではなく、徳川家の菩提寺は2代將軍秀忠の眠る、芝増上寺でした。

しかし、三代將軍家光は天海に大いに帰依し、自分の葬儀は寛永寺に行わせ、遺骸は家康の廟がある日光へ移すようにと遺言しました。その後、4代家

綱、5代綱吉の廟は上野に営まれ、寛永寺は増上寺とともに徳川家の菩提寺となりました。

当然、増上寺側からは反発があったのですが、6代將軍家宣の廟が増上寺に造営されて以降、歴代將軍の墓所は寛永寺と増上寺に交替で造営することが慣例となり、幕末まで続いたそうです。また、吉宗以降は幕府財政儉約のため、寛永寺の門の数が削減されています。

江戸時代後期、最盛期の寛永寺は寺域30万5千余坪、現在の上野公園のほぼ全域が寺の旧境内であり、最盛期には、更にその2倍の面積の寺地を有していました。現東京国立博物館の敷地は寛永寺本坊跡であり、博物館南側の大噴水広場は、根本中堂のあったところでした。

しかし、上野の山は、幕末の慶応4年(1868)、彰義隊の戦、上野戦争の戦場となり、根本中堂をはじめ主要な堂宇を焼失し、残された建物は五重塔、清水堂、大仏殿などだけとなり、更に明治維新後、寺領は没収され、輪王寺宮は還俗、明治6年(1873)には旧境内地が公園用地に指定されるなどして、廃寺状態に追い込まれますが、明治8年(1875)に再発足。江戸時代の境内地だった場所は、上野公園や上野駅の用地となり大きく変貌をとげています。

明治12年(1879)子院の一つの大慈院があった場所に、天海が住していた川越の喜多院の本地堂を移築して本堂とし、復興の途につきます。

太平洋戦争中の東京大空襲では、当時残っていた徳川家霊廟の建物の大部分が焼失してしまい、2度の戦災をまぬがれたいくつかの古建築は、上野公園

内の各所に点在しています。

本堂、根本中堂は、東京芸術大学音楽学部の裏手にある。現在の堂は、寛永寺の子院大慈院のあった敷地に、明治12年(1879)川越喜多院の本地堂を移築したものです。内陣には厨子内に秘仏本尊薬師三尊像を安置していますが堂内は非公開です。

書院、本堂裏手にあり、徳川慶喜が水戸退去の前に、2か月ほど蟄居していた葵の間、あるいは蟄居の間が保存されていますが非公開です。

日本坊表門、国指定重要文化財。

通称黒門。東京国立博物館東側の輪王寺にある。寛永年間の建造物で、もとは博物館正門の位置にありました。

第6番 東叡山寛永寺清水観音堂、重要文化財。

御本尊…千手観世音菩薩

ご真言…おん ばざら たらまきりく

ご詠歌…松風や 音羽の滝は 清水の

結ぶ心は 涼しかるらん

上野公園内、西郷隆盛銅像の近くにあり、千手観音を祀る。寛永8年(1631)建立、当初は摺鉢山古墳にあったが、中堂建立に伴い現在地に移築されました。規模は小さいとはいえ、京都の清水寺本堂と同様の懸造(かけつくり)建築です。

弁天堂、上野公園南側にある不忍池の弁天島、中之島に、天海が琵琶湖の竹生島宝厳寺の弁才天を勧請して建立。島は常陸下館藩主水谷勝隆が築いたもので、当初は橋がなく、舟で参詣していました。

当初の建物は入母屋造ですが、昭和20年3月10

日の東京大空襲で焼失し、昭和33年に八角堂として再建されました。

旧寛永寺五重塔、国指定重要文化財。寛永8年(1631)建立、寛永16年に焼失した後、同年ただちに下総古河城主土井利勝により再建。

塔は旧境内地を使って作られた恩賜上野動物園の園内に位置しており、1958年に寺が寄付したため、現在の所有者は東京都になっています。

塔の初重に安置されていた釈迦如来、薬師如来、弥勒菩薩、阿弥陀如来の四仏は、東京国立博物館に寄託されています。

上野東照宮、寛永4年(1627)、藤堂高虎が上野の高虎の敷地内に創建しました。

社伝によれば、元和2年(1616)、危篤の家康から「自分の魂が末永く鎮まる所を作ってほしい」と高虎と天海に遺言されたといわれています。

『江戸図屏風』はこの頃と見られる現在とは異なる形状の社殿が描かれています。

現在の社殿は、慶安4年(1651)に徳川家光が改築したもので、上野戦争や関東大震災や第二次世界大戦でも焼失を免れています。

そのため強運の神様として、また家康を祭神としていることから出世、勝利、健康長寿の神様として信仰されています。

時の鐘、上野公園内、精養軒の近くにある鐘楼。

現在ある鐘は天明7年(1817)の作です。

大仏山パゴダ、時の鐘の近くにあり、昭和42年の建立。もと上野東照宮本地堂、神仏分離の際に破壊、本尊であった薬師三尊像は江戸時代初期の作りを祀っています。

上野大仏、寛永8年、堀直寄の寄進で最初の大仏が造られました。以後、地震、火災等で消滅と再興を繰り返して、現在は顔の部分のみが大仏山パゴダ脇に保存されています。

東京国立博物館裏手の寛永寺墓地には、徳川将軍15人のうち家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定の6人が眠っています。

厳有院家綱霊廟と常憲院綱吉霊廟の建築物群は、東京の観光名所として知られ旧国宝に指定されていた貴重な歴史的建造物でしたが、昭和20年の空襲で大部分を焼失。焼け残った以下の建造物は現在重要文化財に指定されています。

厳有院霊廟勅額門、同水盤舎、同奥院唐門、

同奥院宝塔

常憲院霊廟勅額門、同水盤舎、同奥院唐門、

同奥院宝塔

洪沢家霊堂は、洪沢栄一前妻の17回忌にあわせて建てられたと伝えられていますが、一般公開されていません。

いずれも寛永寺霊園内にあり、厳有院霊廟の勅額門は外の道路から見ることができません、通常は未公開ですが、5名以上の団体に限り予約制で毎月3日間程度公開されている他に、台東区役所が主催する特別公開が毎年秋に1日だけ行われているようです。

第7番、柳井堂心城院、湯島聖天 天台宗

御本尊…大聖歡喜天

ご真言…おんぎやくぎやくうんそわか

札所本尊…十一面觀世音菩薩、

ご真言…おんまかきやるにきやそわか

ご詠歌…柳井の水清くして 白梅の

香りがぐわし 湯島のみほとけ

元禄7年(1698)湯島天神別当職の天台宗喜見院第三世宥海僧正が、道真公と縁のある大聖歡喜天を湯島天神境内に奉安するため開山したのが始まりであるといわれています。

当寺は、湯島天神の一堂宇で「湯島の聖天さま」として尊崇を得ています。

この聖天は、比叡山から勧請した慈覚大師作と伝えられています。

明治の神仏分離令により喜見院は廃寺になったが、当寺は湯島天神との本末関係を絶つのに留まり、建立当時の因縁により天台宗に属し、単独寺院として寺名を心城院と改め独立したそうです。

また、江戸名水の一つ「柳の井」があることから「柳井堂(りゅうせいどう)」と称しています。

堂宇は、振袖火事、安政の大火、関東大震災や東京大空襲などの多くの災害にも遭うことなく、開基以来約三百年を耐えてきましたが、老朽化が進んだ為、近年改修されました。

小じんまりとした境内ですが、右側は放生池が占め、稲荷社が祀られ、箱庭のような境内です。

男坂の天神石坂38段を上がりますか女坂も好い。

打止

湯島天満宮、通称湯島天神、

明治5年の近代社格制度において郷社に列し、明治18年に府社に昇格、しかし社格制度は現在廃止されています。

主祭神 天之手力雄命(あめのたちからをのみこと)、菅原道真公

古来より江戸、東京における代表的な天満宮であり、学問の神様として知られる菅原道真公を祀っています、普段から学問成就や修学旅行の学生らで非常に賑わいを見せています。

また境内の梅の花も有名で、この地の梅を歌った姉系図の歌「湯島の白梅」昭和17年(1942)、藤原亮子と小畑実で戦中時に大ヒットしました。境内の約三百本の梅木のうち約8割は白梅です。

社伝によれば、雄略天皇2年1月(558)、雄略天皇の勅命により天之手力雄命を祀る社として創建されたと伝えられています。

南北朝時代の正平10年(1355)、住民の請願により菅原道真を勧請して合祀、この時をもって創建とする説あり、湯島天満宮でも1588年創建としています。

徳川家康が江戸城に入ってから徳川家の崇敬を受けました。江戸時代には多くの学者や文人が訪れ崇敬を集める一方、享保期には富籤(とみくじ)の興行が盛んとなり、江戸の三富の一つになります。

さらに湯島天神の富くじは、唯一幕府公認のため御法度破りにならないので庶民に親しまれていました。天保13年(1842)水野忠邦が突富興行一切差止。

平成12年3月31日、「湯島天神」から「湯島天満宮」に改称しています。

神田神社、神田明神

神田祭を行う神社として知られています。

神田、日本橋、秋葉原、大手町、丸の内、旧神田市場、築地魚市場など百八ヶ町会の総氏神です。旧社格は府社。

神社本庁の別表神社となっている、また旧准勅祭

社の東京十社の一社でもあります。御祭神、三柱を祭神として祀る。

一ノ宮大己貴命(おこなむちのみこと=だいこく様)。

縁結びの神様。天平二年(730)鎮座。

二ノ宮少彦名命(すくなひこなのみこと=えびす様)。

商売繁昌の神様。明治七年(1874)に大洗磯前神社より奉祀。

三ノ宮平将門命(まさかど様)。

除災厄除の神様。延慶二年(1309)奉祀、明治七年に構内摂社の将門神社に遷座、昭和59年に本殿に奉祀復帰。

社伝によれば、天平二年(730)、武蔵国豊島郡芝崎村に入植した出雲系の氏族が、大己貴命を祖神として祀つたのに始まります。

神田はもと伊勢神宮の御田(おみた=神田)があった土地で、神田の沈静のために創建され、神田ノ宮と称しました。

承平5年(935)、平将門の乱を起こして敗死した将門の首が京から持ち去られて当社に近くに葬られ、将門の首塚は東国の平氏武将の崇敬を受けました。

14世紀初頭、嘉元年間に疫病が流行し、これが将門の祟りであるとして供養が行われ、

延慶2年(1309)に当社の相殿神とされました。

将門神に祈願すると勝負に勝つと云われています。

江戸時代、江戸城増築に伴い慶長8年に神田台へ、さらに元和2年(1616)に現在地へ遷座し、江戸総鎮守として尊崇されてきました。

江戸三大祭、

日枝社の山王祭、千代田線国会議事堂前、直近。

神田明神の神田祭、三秋葉原駅徒歩5分、

山車が将軍上覧の為に江戸城中に入ったので「天下祭」とも言われました。

富岡八幡宮祭、水掛祭り、大江戸線門前中町駅前

見物客まで「ずぶ濡れ」となり楽しませてくれます。『神輿深川、山車神田、だだっ広いが山王様』と謳

われていたように、神田祭りは山車が中心でしたが、明治に入ると電線の普及等により山車の数は大幅に減少してとうとう神輿ばかりで山車は無くなってしまいました。

「神田囃子」は東京都の無形民俗文化財に指定されています。江戸時代初期に豪華な桃山風社殿が、天明2年(1762)には権現造の社殿が造営されましたが、大正12年(1923)の関東大震災で焼失、その後の1934年に当時では珍しい鉄骨鉄筋コンクリート構造で権現造を模して再建されたことから、昭和20年の東京大空襲では、境内に焼夷弾が落ちたにもかかわらず本殿と拝殿などは焼失を免れました。

江戸時代には「神田明神」と名乗り、周辺の町名にも神田明神を冠したものが多くありました。

明治に入って神社が国家の管理下に入ると、明治元年(1868)に准勅祭社に指定され、その後府社に列

せられ、明治4年(1872)に正式の社号が「神田神社」に改められました。

明治7年(1874)に明治天皇が行幸するにあたって、天皇が参拝する神社に逆臣である平将門が祀られているのはあるまじきこととされて、平将門が祭神から外され、代わりに少彦名命が茨城県の大洗磯前神社から勧請されました。

平将門神霊は境内摂社に遷されましたが、太平洋戦争後の昭和59年になって本社祭神に復帰しました。現在は神社本庁の別表神社となっていて、また旧准勅祭社の東京十社の一社でもあります。

また、野村胡堂の代表作『銭形平次捕物控』の主人公銭形平次が当神田明神下の長屋に住居を構えていたという設定から、敷地内の本殿右手横に映画制作関係者などで建立した「銭形平次の碑」があります。銭形平次は架空の人物です。

神田明神を崇敬する江戸っ子は、成田山新勝寺を参拝しないというタブーが伝えられています。

これは朝廷に対して叛乱を起した平将門を討伐するため、僧寛朝を守護寺護摩堂の空海作といわれる不動明王像と共に成田山新勝寺へ遣わせ、乱の鎮圧のため御護摩の儀式を行わせたことによるもので、即ち、新勝寺参拝は将門を苦しめるとされるため。

同じく将門を祭神とする神楽坂の築土神社にも同様の言い伝えがあり、成田山へ参詣すると道中に災いが起こるとされて、将門に対する信仰心は、崇りや厄災を鎮めることと密接に関わっていました。

ただし、成田屋の屋号で知られる歌舞伎の市川宗家では歌舞伎十八番の一つ『鎌髭』で将門を演じて

おり、「助六」を演じる際には魚河岸との関わりから神田明神内にある水神社への参拝を行い、歌舞伎公演が盛興にて終了するよう願掛け参りが恒例となっているそうです。

湯島聖堂、

江戸時代の元禄3年(1690)、江戸幕府五代将軍徳川綱吉によって建てられた孔子廟であり、後に幕府直轄の学問所となりました。

日本の学校教育発祥の地の掲示があり、湯島天満宮とともに年間を通して合格祈願のために参拝に来る受験生が訪れています。

国指定の史跡にされています。

元禄3年(1690)、林羅山(天正11年(1583)〜明暦3年(1657))が孔子廟を造営し、将軍綱吉がこれを「大成殿」と改称して自ら額の字を執筆しました。

またそれに付属する建物を含めて「聖堂」と呼ぶように改めました。翌、元禄4年2月7日に神位の奉遷が行われて完成しました。

林家の学問所も当地に移転しました。

大成院の建物は、度々の火災によって焼失した上、幕府の実学重視への転換の影響を受けて再建も思うように出来ないままに荒廃していきま

す。その後、寛政異学の禁により聖堂の役目も見直され、寛政9年(1797)林家の私塾が、林家の手を離れて幕府直轄の昌平坂学問所となります。

昌平(しょうへい)とも呼ばれました。

「昌平」とは、孔子が生まれた村の名前で「孔子の諸説、儒学を教える学校」の名前とされて、この地

の地名にもなりました。

以降、聖堂とは湯島聖堂の中でも大成殿のみを指すようになり、また、2年後の寛政11年には長年荒廃していた湯島聖堂の大改築が完成し、敷地面積は一万二千坪から一万六千坪余りとなり、大成殿の建物も水戸の孔子廟にない創建時の2.5倍の規模で黒塗りの建物に改められました。

大成殿は明治以降も残り、多くの人材が集まったのですが、維新政府に引き継がれた後、明治4年(1871)に後進の昌平学校は閉鎖されました。

教育研究機関としての昌平坂学問所は、幕府天文方の流れを汲む開成所、種痘所の流れを汲む医学所と併せて、後の東京大学へ連なる系譜上に載せることができます。

この間、学制公布以前に維新政府は小学↓中学↓大学の規則を公示し、そのモデルとして明治3年、太政官布告により東京府中学がこの地を仮校舎として設置されました。

昌平学校閉鎖後、文部省や現在の東京国立博物館及び国立科学博物館等の前身である国立博物館と共に、東京師範学校、現在の筑波大学や東京女子師範学校、現在のお茶の水女子大学が構内界限に設置されました。また、敷地としての学問所の跡地は、そのほとんどが現在東京医科歯科大学湯島キャンパスとなっています。

明治5年(1872)3月10日から、大成殿で東京初の博覧会文部省博物館主催「湯島聖堂博覧会」が開催されています。

後の東京国立博物館の始まりになります。

大正11年(1922)には敷地が国の史跡に指定されたが、翌年の関東大震災で入徳門と水屋以外の建物が焼失、現在の大成殿は伊東忠太設計、大林組施工により、昭和10年(1935)に再建されたものです。

湯島聖堂脇にある孔子像は世界一高いそうです。

楷(かい)樹、学名…とねりばはつぜのき、漆科

楷は、孔子の墓所に植えられている名木で、孔子の弟子子貢(しこう)が、孔子の墓所に植えたと言われています。

枝や葉が整然としているので、書道という**楷書**の語源ともなったといえます。

大正四年、林学博士白澤保美氏が中国曲阜市(きょくふし)から種子を持ち帰り、東京目黒の農商務省林業試験場で苗に仕立てたのが最初で、苗は当聖廟を始め儒学に関係深い閑谷学校等に植えられました。性来雌雄異株であるうえ、花が咲く迄に三十年もかかるため、種子を得ることが難しかった様です。台湾では爛心木と呼ばれ、牧野富太郎博士は「孔子」と命名されました。

孔子と楷は切り離すことができないようで、特に当廟の樹は正子に当り聖木であると伝い貴重。

聖橋、二つの聖堂、湯島聖堂と、神田川向いの

ニコライ堂を結ぶ橋

檸檬 さだまさし

喰べかけの夢を 聖橋から放る

各駅停車の樺樺色が それをかみくだく
消え去る時には、こうして できるだけ

静かに 堕ちてゆくもの

一口(いもあらい)稲荷社元宮の(い)神木(椋)むく

御祭神… 宇迦之御魂神、菅原道真公、

徳川家康公、金山彦命

移転先… 太田姫稲荷神社 となっています。

東京メトロ千代田線新御茶ノ水駅駿河台交差点出入口から、三井ビル脇の郵便局の道灌通りを明治大

学方面に向う次路地右側に遷座しています。一口は、淡路坂の旧名で一口坂と云われています。

一口稲荷社は、太田姫稲荷神社と言います。極めて豊かな霊験伝承と古い由緒をもつ神社です。『駿河台文化史』昭和10年、神田史跡研究会によると神社の縁起は九世紀に始まるといえます。

詩才を白楽天に比されるほどの詩人参議小野篁(おののたかむら)が承和六年(839)はじめ伯耆国鳥取県の名和港を出港してまもなく、海が大そう荒れ狂い身の危険を感じたため 篁は正装をして舟の舳に座り熱心に普門品の観音経を唱えていると 白髪のお翁が波上に現れて『荒波からは命を守ってやるが 疱瘡(ほうそう)、天然痘(てんねんとう)大流行し治療法がなく非常に恐れられていました を思えば一命が危ない われは太田姫の命である。わが像を常にまつれば この病にかかる事はないであろう』と告げ 波間に姿を消しました。そのお告げを護り自ら翁の像を刻み護持していましたが、後に山城国の南にある一口の里に神社を祝い祭りました。

江戸の開祖として知られる太田資長朝臣、後の道灌の最愛の姫君が重い疱瘡(ほうそう)にかかり絶望の中、人伝に一口稲荷神社の故事を聞き急使をつかわせ祈願使者は祈禱の一枝と幣を授かり帰ると…重篤の病が

癒えた資長朝臣は崇敬の念篤く城内本丸に一社建立し姫君と共に深く敬拝しました。

ある時この城の鬼門を守るべしとの神託があり鬼門に移して太田姫稲荷大明神と奉唱するようになりました。長禄元年(1531)のことでした。

慶長8年(1603)8月、徳川家康公が江戸城へ入られた後、慶長11年の江戸城大改築の際、城内より西丸の鬼門にあたる神田駿河台東側に移されこの坂を一口坂(いもあらいざか)後に鈴木淡路守の屋敷が出来たので淡路坂という様になりました。

その後、代々将軍が崇拝し 修理造営は徳川家が行ったと伝えられています。

太田姫神社は、江戸城外濠の神田川を作るにあたり、伊達家と徳川家が神田山を開創した時、江戸城の結果また鬼門の護り神として江戸城内よりこの地に移されたといえます。

昭和6年(1931) 総武線開通に伴い現在の駿河台下に移る。尚、鐵道甲武線(現中央線)は堀の中にあり開通時天皇家との間に堀幅を減じない、中で商業を営まない、環境を守るとの約束が現在にも至る。

明治期鐵道史より

神木は椋(むく)の落葉高木で花は濃紫が咲きます。カップルを含め参拝者が多い太田姫稲荷です。

所在地 神田駿河台1-2-3

江戸観音霊場巡り 20230618 熊倉記



URL: <http://88souma.com/>

昭和新撰江戸 33 観音霊場一覧

札番	山・院・寺号	霊場御本尊	住所
1 番	金龍山 浅草寺	聖観世音菩薩	台東区浅草 2 影向堂に第一番
2 番	江北山 宝聚院 清水寺	千手千眼観世音	台東区松が谷 2
3 番	大観音寺	正観世音菩薩	中央区日本橋人形町 1
4 番	諸宗山 無縁寺 回向院	馬頭観世音菩薩	墨田区両国 2 旧両国国技館
5 番	新高野山 大安楽寺	十一面観世音菩薩	中央区日本橋小伝馬町 3 伝馬町牢屋敷跡地
6 番	東叡山 寛永寺 清水観音堂	千手観世音菩薩	台東区上野公園 円形の「月の松」
7 番	柳井堂 心城院	十一面観世音菩薩	文京区湯島 3
8 番	東梅山 花陽院 清林寺	聖観世音菩薩	文京区向丘 2
9 番	東光山 見性院 定泉寺	十一面観世音菩薩	文京区本駒込
10 番	湯嶼山 常光院 浄心寺	十一面観世音菩薩	文京区向丘 2
11 番	南緑山 正徳院 円乗寺	聖観世音菩薩	文京区白山 1 八百屋お七の墓所
12 番	無量山 寿経寺 伝通院	聖観世音菩薩	文京区小石川 3 於大の方、陵墓
13 番	神齡山 悉地院 護国寺	如意輪観世音菩薩	文京区大塚 5
14 番	神霊山 慈眼寺 金乗院	聖観世音菩薩	豊島区高田 2
15 番	光松山 威盛院 放生寺	聖観世音菩薩	新宿区西早稲田
16 番	医光山 長寿院 安養寺	十一面観世音菩薩	新宿区神楽坂 6
17 番	如意輪山 宝福寺	如意輪観世音菩薩	中野区南台 3
18 番	金鷄山 真成院	潮干十一面観音	新宿区若葉 2
19 番	医王山 悉地院 東円寺	聖観世音菩薩	杉並区和田
20 番	光明山 和合院 天徳寺	聖観世音菩薩	港区虎ノ門
21 番	三縁山 広度院 増上寺	聖観世音菩薩	港区芝公園 4
22 番	補陀山 長谷寺	十一面観世音菩薩	港区西麻布 2
23 番	金龍山 大円寺	七仏観世音菩薩	文京区向丘 1
24 番	長青山 宝樹寺 梅窓院	泰平観世音菩薩	港区南青山
25 番	三田山 水月院 魚籃寺	魚籃観世音菩薩	港区三田
26 番	周光山 長寿院 済海寺	亀塚観世音菩薩	港区三田 4
27 番	来迎山 道往寺	聖観世音菩薩	港区高輪
28 番	勝林山 金地院	聖観世音菩薩	港区芝公園 3
29 番	高野山 東京別院	聖観世音菩薩	港区高輪
30 番	豊盛山 延命院 一心寺	聖観世音菩薩	品川区北品川 2
31 番	海照山 普門院 品川寺	水月観世音菩薩	品川区南品川 3
32 番	世田谷山 観音寺	聖観世音菩薩	世田谷区下馬 4
33 番	泰叡山 瀧泉寺	聖観世音菩薩	目黒区下目黒 3 目黒不動
番外	龍吟山 海雲寺	十一面観世音菩薩	品川区南品川 3